

Title	慶應義塾と益田一族(関口操教授退任記念号)
Sub Title	Keiogizyuku and Family of Masuda(In Honour of Professor Misao Sekiguchi)
Author	武内, 成(Takenouchi, Osamu)
Publisher	
Publication year	1991
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.34, No.1 (1991. 4) ,p.105- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19910425-04056035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
34 卷 1 号
1991 年 4 月

慶應義塾と益田一族

武内 成

はじめに

これまで、われわれは明治期の三井の諸会社における慶應義塾卒業生の動向について考えてきた¹⁾が、この論文では、再度、テーマとしてきた慶應義塾と三井の関係を考えるために、三井物産会社の創設者であり、中上川彦次郎没後の三井の重鎮でもあった益田孝および益田一族と慶應義塾の関係について考察する。

益田孝についての伝記として、長井実による『自叙益田孝翁』があり、福澤諭吉について触れたところから取り上げて考えてみることにしたい。

『自叙益田孝翁』において、益田孝が福澤について述べているのは、益田の父親である鷹之助(後に鳳という)²⁾が、柏木宗蔵の紹介で福澤の書記をやっていたということからはじまり、この益田鳳との関係は、福澤が幕府の外国方に勤務していたころからであった。また、同書によれば、益田孝がはじめて福澤に会ったのは、福澤が幕府の外国方の通弁をやっていたころのことであり、「初めて出仕した日に最初に茶を汲んで持って行ったのが、福澤先生と松木弘庵即ち寺島宗伯とが向き合って話をしている処であった。福澤先生は袴を穿かず着流しであった³⁾」という。少なくとも、正確な年月は解らないけれども、かなり以前から益田は福澤を知っているのである。

また、中上川彦次郎没後も三井にいた朝吹英二について、益田が話しているところに福澤の話が出てくる。すなわち、「朝吹は三菱を出て横浜で、生糸を輸出する会社をやった。此の会社は福澤

1) 拙稿「三井銀行における慶應義塾卒業生の動向」『三田商学研究』1984年8月号、第27巻3号、64～119頁。拙稿「三井物産会社における慶應義塾卒業生の動向」『三田商学研究』1985年12月号、第28巻5号、34～65頁。拙稿「三井呉服店および三井工業部における慶應義塾卒業生の動向」『近代日本研究』1986年、3号、57～111頁。拙稿「明治・大正期における三井の経営戦略」『杏林社会科学研究』平成元年、第6巻第1号、1～15頁。

2) 長井実『自叙益田孝翁』成武堂印刷所、昭和14年6月刊、12～15頁。

3) 長井実『自叙益田孝翁』26～27頁。

先生も関係して居られ、朝吹は三菱と福澤を代表して此の会社をやったのである。三井からは馬越恭平〔註・当時三井物産会社横浜支店長〕を代表者として入れてあった。……此の会社は旨く行かなくて、百万円借金が出来たが、朝吹は其れを全部一人で背負ってしまった⁴⁾ということである。

この『自叙益田孝翁』における福澤に対する記述では、益田が「柏木は福澤先生と懇意であった。私の父が福澤先生の書記になったのは柏木が世話をしたのである」と述べており、また、「慶應義塾の最初の規則は父が書いた。お前のおやちの書いたのがまだ残って居ると云ふことをよく福澤先生が云ふておられた⁵⁾」とも述べている。益田の自伝からは、このような慶應義塾、福澤の関係が明らかになるだけであるが、これについて、『慶應義塾百年史』では何も触れていない。

また、中上川彦次郎について、益田はあまり語ることはないが、朝吹英二が三井に採用される時、中上川が益田に相談して入れたという記述がある。すなわち、『自叙益田孝翁』では「中上川が三井に入ると〔註・明治二十四年八月〕、川田小一郎〔註・日本銀行総裁〕が中川上に、朝吹を何とか救ふてやって呉れる道はあるまいかと云う相談をした。…中上川の腹では、益田が何と云ふだろうと云ふ懸念があったに相違ないが、私が即座に大賛成をしたので、中上川は意外で、大変喜んだ。中上川も喜び、川田も喜んだ。三井に工業部と云ふものを作って〔註・明治二十七年〕朝吹を其の部長にした⁶⁾」というのである。この朝吹の三井採用が明治27年ということであるから、この時期は中上川と益田の間はそれほど険悪なものではなかったのであろう。

益田孝の自伝『自叙益田孝翁』では、これらのことが述べられているだけであるが、そもそも益田一族と慶應義塾との関係は、どのようなものであったのであろうか。益田孝には、莊作〔後に克徳〕、英作という兄弟が2名おり、また、孝の息子として太郎がいる。これらの益田孝以外の人々が、いずれも慶應義塾の卒業生であったことはこれまで触れられなかったが、これを確認できる資料が昭和61年に慶應義塾大学の福澤研究センターから出版されているので、益田一族と相前後して慶應義塾に在学した人々を取り上げ、『交詢社百年史』と『慶應義塾百年史』からこれらの関係を裏付けてみたい。こういった問題が、三井と中上川彦次郎の問題を考える一助になるものと思われる。

かかる動機から本論文を編んだものであるが、その構成を述べれば、まず第1章において『慶應義塾入社帳』から益田一族の人々が慶應義塾に入社した時期に在学していた者で、後年、三井の関係会社に入っている人物を抽出し、つぎの第2章では『交詢社百年史』と『慶應義塾百年史』から益田一族の関連記事を取り上げ、最後に結論を述べたい。

4) 長井実『自叙益田孝翁』221～222頁。これは『朝吹英二伝』〔大西理平著、凶書出版社〕によれば、貿易商会のことである。同書67～71頁参照。

5) 長井実『自叙益田孝翁』12頁。

6) 長井実『自叙益田孝翁』223～224頁。

第1章 『慶應義塾入社帳』における益田一族と関係者

『慶應義塾入社帳』は慶應義塾大学の福澤研究センターが、昭和61年9月に編纂し、出版したものである。そして、これは文久3（1863）年から明治34（1901）年までの慶應義塾への入学者を歴年に編集している。その内容は三田本塾分28冊、無罫紙本、医学所、大阪・徳島慶應義塾、法律学校、大学部、幼稚舎からなり、これを5冊に分冊して発行したものである。

そこで、この『慶應義塾入社帳』について見ていくと、その一号では「本人姓名、生国、住所、主人ノ姓名（コレナキ者ハ領主ノ姓名）、父或ハ兄弟ノ姓名、年齢、社中ニ入りタル月日、入塾證人ノ姓名印」の項目からなっている。また、『慶應義塾入社帳』の三号から「本人姓名、府藩縣、身分、宿所、父或ハ兄弟ノ姓名、年齢、社中ニ入りタル月日、入塾證人ノ姓名」と代わり、入社帳八号の明治8年から「本人姓名、府縣住所身分、誰何男カ弟或ハ当主及ヒ年齢、入社ノ年月、證人ノ住所姓名」となっており、ここでは、姓名のつぎに出身地、身分、年齢、慶應義塾への入社時期、最後に『慶應義塾入社帳』の巻数とその頁数を入れておいた。

これらのなかから後に三井に関係した代表的な人物を選べば、『入社姓名録第一』号〔自文久三年 至明治二年八月〕には、中上川彦次郎（生國豊前中津、年齢十六、明治二年五月八日入塾、入塾證人＝福澤諭吉、I-266頁）がいる。また、『入社姓名録 明治二巳年第二』号〔自明治二年八月 至明治四年四月〕には、丹文次郎〔後に幸馬に改名〕（年齢十九歳、生國伊予西条、明治二年十一月十六日入塾、入塾證人＝なし、I-293頁）、益田莊作〔克徳に改名〕（年齢十八歳、生國佐州相川、明治二年十二月三日入塾、入塾證人＝益田鳳梧、I-296頁）、朝吹英二（年齢廿二歳、生國豊前、明治三年十二月廿一日入塾、入塾證人＝なし、379頁）、猪狩麻次郎（年齢十八歳、生國中津、明治四年二月廿五日入塾、入塾證人＝なし、I-384頁）、この他に法律学校の入社帳に明治7年3月27日に猪狩の名前がある。V-119頁）などの名前がある。

『入社姓名録』の入社帳四号〔自明治五年三月至明治六年三月〕では、波多野承五郎（府藩縣木更津縣、身分属土族、年齢十五歳、明治五年三月十八日入塾、入塾證人＝岡本高通、I-508頁）がおり、「入

7) 福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』第一巻〔自文久三年一月 至明治八年七月〕以下とIと略す。第二巻〔自明治八年八月 至明治一六年二月〕以下IIと略す（発行 慶應義塾、昭和六一年三月十六日）、第三巻〔自明治一六年二月 至明治二一年九月〕以下IIIと略す（発行 慶應義塾、昭和六一年五月十五日）、第四巻〔自明治二一年九月 至明治三四年十一月〕以下IVと略す（発行 慶應義塾、昭和六一年七月十五日）、第五巻、大阪・徳島慶應義塾入社帳〔自明治六年十一月至明治九年十月〕、医学所入社帳〔自明治六年十月 至明治十二年十一月〕、法律学校入社帳〔自明治十二年十二月 至明治十三年六月〕、再入社帳〔自明治十八年一月 至明治十八年三月〕、大学部入社帳〔自明治二三年二月 至明治二五年五月〕、挿入書類および別置書類、以下Vと略す（発行 慶應義塾、昭和六一年九月三十日）、また、第五巻には索引がついている。この『慶應義塾入社帳』全五巻を著者はいいただいた。この紙面を借りて関係の皆さまに感謝の意を表したい。ここに挙げた人物は本文に『慶應義塾入社帳』の号数と頁数を入れておいた。この本文で取り上げた慶應義塾の卒業生については、拙稿「三井銀行における慶應義塾卒業生の動向」、拙稿「三井物産会社における慶應義塾卒業生の動向」、拙稿「三井呉服店および三井工業部における慶應義塾卒業生の動向」を参考にさせていただきたい。

社帳五・六号〔自明治六年四月 至明治七年十二月〕には、益田英作（府縣東京府，身分士族，年齢九年五ヶ月，明治六年十月二十七日入塾，入塾証人＝益田孝，I—625頁，この他に幼稚舎入社帳に名前があり，その「戸主」の欄は，「益田孝弟」となっており，入社年月日は明治七年一月十一日となっている。V—330頁），福原榮太郎（府縣山口縣，身分士族，宿所和田義郎方，年齢十一，明治七年三月廿三日入塾，入塾証人＝和田義郎，I—652頁，この他に『幼稚舎入社帳』〔第一号～第四号 自明治七年一月 至明治三十四年一月の幼稚舎一号〕に名前があり，幼稚舎への入社は明治七年三月廿四日であり，その保証人は井上薫となっている。V—330頁），酒井良明（府縣敦賀縣，身分士族，年齢二十二年六月，明治七年十一月二日入塾，入塾証人＝水野行敏，I—691頁）などの名前がある。

そして，入社帳九号〔自明治九年十月 至明治十二年三月〕になると石川彦太（府縣住所身分，群馬縣下上野國碓氷，年齢廿二年三ヶ月，明治十一年十一月十一日入社，入塾証人＝田中質直，II—238頁）の名前があり，つぎの入社帳十号〔自明治十二年三月 至明治十三年二月〕では，村上定（府縣住所身分，広島縣，年齢，安政四年十月生。當二十年七ヶ月，明治十二年五月十五日入社，入塾証人＝平松浴耳，II—274頁），平賀敏（府縣住所身分，静岡縣，年齢 安政六年八月十三日生 當二十年一ヶ月，明治十二年九月十二日入社，入塾証人＝鳥塚新之助，II—285頁），矢田績（府縣住所身分 和歌山縣 士族，年齢 萬延元申八月生 十九年五ヶ月，明治十三年一月廿六日入社，入塾証人＝鎌田榮吉，II—304頁）の名前を見付けることができる。

さらに，入社帳十一号〔自明治十三年二月 至明治十四年三月〕には，佐久間山治〔武藤山治に改名〕（府縣住所身分 岐阜縣，年齢 慶應三年三月生，明治十三年五月十日入社，入塾証人＝吉田榮次郎，II—320頁，この他に『幼稚舎入社帳』の幼稚舎入社一号に名前がある。V—346頁），日比翁助（府縣住所身分 福岡縣 士族，年齢 萬延元年六月生，明治十三年九月一日入社，入塾証人＝松下丈吉，II—331頁），鈴木梅四郎〔小林から改姓〕（府縣住所身分 長野縣上水内郡 平民，年齢 文久二年十二月生，明治十四年三月入社，入塾証人＝伊東善兵衛，II—367頁）などがいる。

入社帳十六号〔自明治十六年十月 至明治十七年十月〕には，伊澤良立（府縣住所身分 京都府 士族，年齢 慶應三年一月廿三日生，明治十七年二月入社，入塾証人＝生駒正守，III—076頁），小野友次郎（府縣住所身分 大分縣 平民，年齢 元治元年一月四日生，明治十七年三月廿一日入社，入塾証人＝黒川正治，III—086頁），松下高策〔市川に改姓〕（府縣住所身分 山梨縣甲斐國，年齢 明治元年三月生，明治十七年五月入社，入塾証人＝岡田次郎作，III—093頁，この他に『大学部入社帳第一号』〔自明治二十三年二月 至明治二十五年五月〕に名前があり，生年月日は明治元年五月五日生 明治廿四年六月入社となっている。V—314頁），益田達（府縣住所身分 東京府北多摩郡，克徳長男，年齢 明治八年一月生，明治十七年九月八日入社，入塾証人＝益田克徳，III—106頁），伊吹雷太〔藤山と改姓〕（府縣住所身分 長崎縣 平民，年齢 文久三年八月一日生，明治十七年九月十日入社，入塾証人＝松田藤吉，III—108頁），朝吹常吉（府縣住所身分 東京府 平民，英二長男，年齢 明治十年十一月生，明治十七年十月四日入社，入塾証人＝中上川彦次郎，III—117

頁)の名前がある。

また、入社帳十七号〔自明治十七年十月 至明治十八年十月〕では、門野 鍊八郎(府縣住所身分 三重縣志摩 士族, 年齢 明治元年八月十一日生, 明治十七年十二月一日入社, 入塾證人=門野幾之進, III-126頁), 柳莊太郎(府縣住所身分 長野縣松代 士族, 年齢 二十二年九ヶ月, 明治十八年五月一日入社, 入塾證人=田中彦七, III-147頁), 益田太郎(すべて不明, III-161頁)の名前があるが, この太郎の入塾時期は, 記載された名簿の順から考えると明治十八年七月八日と同年七月十六日の間であろう。

入社帳十八号〔自明治十八年十月 至明治十九年五月〕では, 小田久太郎(府縣住所身分 長崎縣對馬國 士族, 年齢 慶應二年十月生, 入塾證人=尾崎迎太郎, 明治十九年一月十五日入社, III-198頁), 磯村豊太郎(府縣住所身分 長崎縣 士族, 年齢 明治元年十一月生, 明治十九年三月三日入社, 入塾證人=津田興二, III-210頁)などがある。

つづく入社帳十九号〔自明治十九年五月 至明治二十年一月〕には, 中尾辰介(府縣住所身分 山口縣 士族, 年齢 明治元年一月生, 明治十九年九月入社, 入塾證人=中尾山介, III-252頁), 野口寅次郎(府縣住所身分 群馬縣前橋 士族, 年齢 生不明, 明治十九年九月入社, 入塾證人=三浦鐔五郎, III-255頁), 林信一郎(府縣住所身分 鹿児島縣, 年齢 明治六年五月生, 明治十九年十月五日入社, 入塾證人=村田一郎, III-273頁), 大嶋雅太郎〔大島〕(府縣住所身分 宮崎縣 士族, 年齢 明治元年正月二日生, 明治十九年十一月入社, 入塾證人=蓑谷英彦, II-288頁), 林純一(府縣住所身分 山口縣 士族, 年齢 明治二年四月生, 明治十九年十二月一日入社, 入塾證人=牧野秀太郎, III-298頁), 池田慎平〔成彬に改名〕(府縣住所身分 山形縣 士族, 年齢 慶應三年七月出生, 明治十九年十二月二日入社, 入塾證人=芹澤孝太郎, III-298頁)の他に大学部入社帳第一号に名前がある。V-319頁), 櫻井信四郎(府縣住所身分 神奈川県 士族, 年齢 明治十二年一月生, 明治二十年二月二日入社, 入塾證人=櫻井恒太郎, III-304頁, この他に幼稚舎入社帳第二号に名前がある。V-403頁), 田澤昌孝(府縣住所身分 東京府 士族, 年齢 明治六年十月七日生, 明治二十年一月十一日入社, 入塾證人=田澤昌武, III-305頁), 藤原銀二郎(府縣住所身分 長野縣, 年齢 明治二年六月出生, 明治二十年一月十三日入社, 入塾證人=藤卯兵衛, III-312頁, この他に大学部入社帳第一号に名前がある。V-319頁)などの名前が挙がっている。

このように『慶應義塾入社帳』をみると後年, 三井で活躍した人々が一時期, 慶應義塾に集まり, このなかに益田一族の関係者がかなりいることがわかる。例えば, 中上川と益田孝の弟である克徳が, 明治2年の入社であり, 朝吹英二が1年遅れの同3年12月に入社している。また, 中上川没後も三井に残った波多野承五郎は, 益田孝の末弟英作と近い年次に慶應義塾に入社しており, 孝の子息である太郎も同18年に入社し, 門野鍊八郎, 柳莊太郎の入社と前後している。しかも, 慶應義塾を経て益田の三井物産に入社した福原栄太郎は明治7年に入社し, 幼稚舎の入社保証人は井上馨となっている。克徳の子供達は, 朝吹英二の子供である常吉と同じ明治17年に入社している。そして, 克徳の保証人は孝の父親である鵬がなり, 末弟の英作の保証人には孝自らとなっている。そ

の後には、池田成彬、藤原銀二郎などが慶應義塾に入社してきている。

それでは、益田一族と慶應義塾との関係を見るために、つぎに『交詢社百年史』と『慶應義塾百年史』から考えることにしたい。

第2章 交詢社、慶應義塾と益田一族

さて、この章では、益田一族の慶應義塾との関係をみるために、交詢社と慶應義塾の創立時の記録からみていくことにする。

まず、福澤諭吉が中心となって結成された組織に交詢社がある。この交詢社について『交詢社百年史』に「福澤諭吉の主唱のもとに、知識を交換し世務を諮詢することを目的として結成された社交クラブである⁸⁾」とあり、これが結成されたのは、明治13年1月25日のことであった。その目的とするところは、「問題を集めて百方に質し、百意見を集めて千人に報じ、之を口に伝え又郵便電信に附し、又或は之を集めて随時発兌の雑誌に記し、衆知を合して大智と為す⁹⁾」にある。

しかし、この組織は当初からうまくいっていたわけではない。この創立の時期が明治14年の政変と重なっていることから、福澤自ら「本社は初より政談の社に非ず。然るに近来は世上に政治の談論流行して政党の団結も少なからず。其政党の中には本社の社員にして同盟したる者も多からんと雖も、政党は政党なり、交詢社は交詢社なり、相互に関係する者に非ず¹⁰⁾」と述べている。いうまでもなく、この明治14年の政変が慶應義塾に与えた影響はかなり大きなものであった。すなわち、慶應義塾も交詢社も世間から福澤の機関としてみなされていたのであり、福澤の弁明にもかかわらず、慶應義塾の内部にも、政党運動に加わっていくものがいた。

さて、益田孝も益田の兄弟である克徳、英作、息子である太郎もこの交詢社に何らかの関係をもっていた。

まず、益田克徳であるが、克徳は明治14年1月に交詢社を退社している。これは明治14年の政変とかかわりがあったと考えられるが、その際のかれの肩書きは保険会社支配人であり、克徳が東京海上火災保険会社の取締に就任するのは、明治12年のことである。また、彼が門野幾之進の明治生命の取締になるのは、明治25年1月22日のことであった。これは克徳が没する明治36年4月8日までとなっている¹¹⁾。

この『交詢社百年史』は、益田英作についての社交クラブにおける活躍を報じるのみであり、こ

8) 『交詢社百年史』財団法人交詢社刊、昭和58年10月20日、3頁。

9) 『交詢社百年史』58頁。

10) 『交詢社百年史』67頁。

11) 『明治生命九十年史—資料編一』昭和52年5月25日刊、360頁。

12) 『交詢社百年史』257頁、296～297頁。

れは三井の高橋義雄と行動を共にしていることを述べておかなければならない。¹²⁾さらに、益田太郎については、やはり、明治42年1月23日にその活動をみるることができるのみである。

益田孝については、この交詢社では金曜午餐会と火曜晚餐会が開かれていたが、火曜晚餐会は「多くは特定の人物（これは社員に限らない）を招待して、時事問題や外国の事情を聞いたり、新内閣の閣僚や来日した外国要人を歓迎することがしばしば行われた」¹³⁾ものであり、益田孝がこの交詢社の火曜晚餐会に参加したのは、明治41年2月13日のことであった。そして、大正3年の交詢社社員名簿に慶應義塾出身者の他に、益田孝は三井合名会社顧問、息子の太郎は台湾製糖常務取締役として記載され、同14年10月現在の社員名簿に益田孝は「記載なし」の項目にその名前があり、太郎は大正3年と同じく台湾製糖常務取締役となっている。¹⁴⁾もちろん、この交詢社の社員名簿には三井から追い出された藤山雷太、平賀敏、津田興二も含まれている。¹⁵⁾

このように交詢社の設立当初は、益田孝は関係をもっていなかったけれども、中上川の没後に、かなり交詢社との関係が深くなっているようである。

また、『慶應義塾百年史』における益田一族の動向をみることにしよう。益田克徳については、明治初期に慶應義塾が各藩に教師を派遣していたことがあった。克徳は高松藩の藩校に派遣されていたことがある。この時期に慶應義塾から派遣された教員には、中上川彦次郎（宇和島藩）を初め、荘田平五郎・波多野承五郎（木更津塾）、小川駒橋（久居藩）、成瀬隆蔵（商法講習所）、甲斐織衛（神戸商法講習所）¹⁶⁾などがおり、益田克徳もこの中の一員であったものと思われる。また、明治14年の8月には「北海道開拓使官有物払下げ問題」が起こるが、この時、大阪新富座の演説会の講師に克徳も名を連ねている。¹⁷⁾

益田克徳は明治36年4月8日に没する。この他に、かれの慶應義塾に関係した活動は記録がない。また、『慶應義塾百年史』には、益田英作（紅艷は号）が大正10年2月2日に没しているが、英作の記事はない。

最後に、益田孝が『慶應義塾百年史』に登場するのは、慶應義塾に食養研究所が設立された時期である。この記述によれば、この研究所は「わが国の人口および食糧問題解決に努力するとともに、健康人や病人の栄養についての研究および特に患者の食餌療法の科学的改善を目的とする」¹⁸⁾ものであって、この趣旨に賛同した人物のなかに益田孝と門野幾之進がおり、益田と門野はこの資金集めの中心になっている。これが開始されたのは大正12年6月からであり、この資金の引渡が行わ

13) 『交詢社百年史』258～259頁。

14) 『交詢社百年史』260頁。

15) 『交詢社百年史』551頁、554頁、557頁。

16) 『慶應義塾百年史』上巻、昭和33年11月8日、569頁。

17) 『慶應義塾百年史』上巻、569～571頁。

18) 『慶應義塾百年史』上巻、767頁。

れたのは、同13年8月であり、その金額は10万5千円であったという。¹⁹⁾

この章では益田一族の慶應義塾との関係をみるために、福澤が造った交詢社と『慶應義塾百年史』から考えてきた。序論部においてみたように、益田一族は孝の父鳳から、福澤と関係があったのであり、かれの兄弟である克徳、英作も、また、孝の息子である太郎、克徳の子息である達、徳隣も慶應義塾の卒業生である。しかも、これを実業の分野に広げてみれば、慶應義塾の卒業生との関係は遙に密なものとなってくる。

結 語

さて、われわれは益田一族と慶應義塾の関係を第1章では『慶應義塾入社帳』から益田一族が慶應義塾に在籍した時期の三井関係者を選び出し、第2章では交詢社と慶應義塾の記録から益田一族が、どのような関係を持っていたかを述べてきた。

すなわち、ここに取り上げた人々は慶應義塾を卒業し、その後、いずれかの会社を経て三井に入社した人々である。そして、益田孝の次弟である益田荘作（後に克徳）は、明治2年12月3日に入社し、その証人は益田孝の父である鳳となっている。この鳳は明治維新以前から福澤と付き合いがあり、『自叙益田孝翁傳』によれば、福澤の書記を勤めたこともあるという。また、次弟である益田英作は、明治6年10月27日に慶應義塾に入り、その入塾証人には益田孝がなっている。ただ、孝の長男である太郎が慶應義塾に入塾したのは、明治18年7月であったが、どういった事情からか、入塾証人の氏名はない。

そして、益田克徳の慶應義塾入塾時に相前後して慶應義塾に入塾した人物には、中上川彦次郎、丹幸馬（三井銀行）、朝吹英二（三井元方）、猪狩麻次郎（三井銀行）といった人々がおおり、中上川が明治2年5月8日、丹が同年11月16日、克徳が同年12月3日、朝吹が同3年12月21日、猪狩が同4年2月25日であった。

また、益田英作と同時期に慶應義塾に入っている者には、波多野承五郎（三井銀行）、福原栄太郎（三井物産・小野田セメント）、酒井良明（三井元方書記、三越呉服店）、石川彦太（三井工業部）などがおおり、波多野が明治5年3月18日、英作が明治6年10月27日、福原が同7年3月23日、酒井が同年11月2日、石川が明治11年11月11日であった。孝の息子の太郎と同時期には、門野鍊八郎（三井銀行）、篠原多一郎（三井銀行）、柳荘太郎（三井工業部）などがおおり、門野は明治17年12月1日、篠原は同18年2月、柳は同18年5月1日であり、太郎はこれに続いている。さらに、この後、同19年には池田成彬（三井銀行）、藤原銀次郎（三井銀行、三井物産、王子製紙）らが慶應義塾に入ってきている。

ここで、益田孝が慶應義塾に入塾した人物の入塾証人になっているので、その人物の名前を挙げ

19) 『慶應義塾百年史』中巻、後、昭和39年10月20日、190～194頁、通巻、1870～1874頁。

れば、荒田科蔵(『慶應義塾入社帳』第一巻、672頁)、金子順介(『慶應義塾入社帳』第三巻、明治廿二年一月入社、024頁、幼稚舎入社帳第一号に金子純介とあり、この證人も益田孝である。V-431)などがある。また、益田克徳が證人になっているものに、益田達と益田徳隣(『慶應義塾入社帳』第五巻、幼稚舎四号、明治三十一年五月一日入社、V-537)がいる。

このような状況をみるかぎり、益田一族における鳳、孝の以外の者は、すべて慶應義塾の在籍者ということになる。

また、交詢社における益田関係の記事をみれば、益田孝の名前が出てくるのは、明治41年2月のことであり、これは三井を代表して欧米視察に出掛けた報告のためである。また、克徳は交詢社を明治14年1月に辞めているが、この理由は正確にはわからないけれども、第2章において、福澤の言葉を引用しておいたように、政治運動が盛んに行われた時期であり、これに関係していたのではないと思われるし、克徳だけがこの時期に交詢社を辞めたのではない。

益田英作については、高橋義雄と共に交詢社の演劇活動において、その名前をみるだけである。しかし、大正に入って交詢社の社員名簿には益田孝、太郎の名前がみられる。因みに、その肩書きをみれば、大正3年の名簿では、益田孝は三井合名会社顧問、太郎は台湾製糖会社常務取締役となっており、同14年の名簿には、益田孝は記載なしであり、この時期には三井から引退しているからであるが、太郎の肩書きは変わらない。

つぎに『慶應義塾百年史』において、益田一族の名前が出てくるのは、益田克徳の高松藩への講師派遣の件が初めである。この時期に、慶應義塾から全国に教師を派遣していたが、克徳もその一員であった。また、益田孝が『慶應義塾百年史』にその名を表すのは、大正期であり、その以前はまったくない。しかし、大正12年6月の食養研究所の資金集めとその引渡であり、これは千代田生命の門野幾之進と共にである。千代田生命保険会社の設立に益田と門野は協力している。

慶應義塾における益田一族の関係を物語るものはこれ以外にないと思われるが、その子弟の教育においては慶應義塾との関係がかなり深かったように思われる。このような視点から、益田と慶應義塾、益田と中上川をみるとかなり違ったものがみえてくる。

[杏林大学]